

## 北海道における地震に関するアイヌの口碑伝説と歴史記録

日本原子力研究開発機構 幌延深地層研究センター<sup>1</sup>  
明治コンサルタント株式会社<sup>2</sup>  
北海道立地質研究所<sup>3</sup>

新里 忠史  
重野 聖之  
高清水 康博

Ainu oral traditions and historical records on earthquakes in Hokkaido, Japan

Tadafumi NIIZATO

Horonobe Underground Research Center, Japan Atomic Energy Agency (JAEA)  
Hokushin432-2, Horonobe, Hokkaido, 098-3224, Japan

Kiyoyuki SHIGENO

Meiji Consultant Co., Ltd.  
Minami7 Nishi1-13, Chuo-ku, Sapporo, 064-0807, Japan

Yasuhiro TAKASHIMIZU

Department of Environmental Geology, Geological Survey of Hokkaido  
Kita19 Nishi12, Kita-ku Sapporo, 060-0819, Japan

In this paper, Ainu oral traditions and historical records on earthquakes in the Ainu Cultural period were collected from the Ainu-related literatures. Then their reliabilities on the occurrence of the past earthquakes in Hokkaido were examined. As a result, we interpreted that 23 of 28 collected traditions and records are based on past earthquakes, and that the others are not related to earthquakes. It is inferred that earthquakes hit Hokkaido were mainly distributed around the Pacific coastal area, the middle reach of the Tokachi River, eastern side of the Lake Saroma, and the Lake Kussharo during the Ainu Cultural period and the previous period. Those areas are adjacent to the seismically active area at present in and around the Hokkaido. Given that the Ainu Cultural period is 12th to the late 19th centuries, it is reasonable to suppose that there's been no change in the seismically active area during the past 700 years. Accordingly, it may be presumed that distribution of earthquakes over the next 700 years is same as that of present-day earthquakes based on an extrapolation of the past and present seismicity into the future.

キーワード: 口碑伝説, 歴史記録, アイヌ, 歴史地震, アイヌ文化期, 北海道

Key words: oral tradition, historical record, Ainu, historical earthquake, Ainu Cultural period, Hokkaido

### §1. はじめに

日本原子力研究開発機構では、北海道北部に位置する幌延地域を事例研究の対象地域として、地震・断層活動や隆起・沈降といった天然現象の履歴およびそれらが地質環境に及ぼす影響を把握するための方法について、それぞれの方法の長所・短所や最適な組み合わせ等に関する検討を進めている。

過去の地震活動を把握する方法としては、活断層の活動履歴の調査[活断層研究会編(1991), 中田・今泉(2002)など], 津波堆積物などの地震イベント堆積物の空間分布や形成時期の調査[藤原・他(2004), 寒川(1999)など], および文献史料を対象とした地震や津波に関する歴史記録の収集[小山(1999)]などによる史料地震学などが挙げられる。北海道について

<sup>1</sup> 〒098-3224 北海道天塩郡幌延町 北進 432-2

<sup>2</sup> 〒064-0807 北海道札幌市中央区南 7 条西 13 丁目

<sup>3</sup> 〒060-0819 北海道札幌市北区北 19 条西 21 丁目

みると、活断層については、中田・今泉(2002)などによる成果が利用可能である。また、地震イベント堆積物については、太平洋側では、平川・他(2000)、Nanayama et al.(2003)、および添田・他(2004)などがあり、オホーツク海側では、仁科・他(2004)がイベント砂層の研究を進めている。北海道北部の日本海側では、深海底の地震性タービダイトを対象とした池原(2000)などの研究成果があるが、津波堆積物等はいまだ見つかっていない[下川・他(2000)]。一方、文献史料については、北海道における18世紀半ば以前の文献史料がほぼ皆無であることから、北海道北部地域を含めて、それにより過去の地震活動などを把握することが非常に困難な状況である。

地震活動についてみると、北海道北部地域では、その北西部を南北に縦断する幅約50kmの地震帯が認められ、定常的な微小地震活動とともに、最大M4.3の群発地震が時折発生している[田村・他(2003)]。また、2004年12月14日には、幌延地域南側の留萌支庁南部を震源とするM6.1の地震が発生した[高橋・笠原(2005)など]。数少ない文献史料によると、幌延地域を含む北海道北部の日本海側において1874年(M6.4)、1910年(M5.9)、および1918年(M4.7~4.9)に地震が発生している[高橋・笠原(2005)など]。このため、文献史料等がいまだ見つかってなくとも、過去に地震が発生していた可能性は高い。一方、地震活動が幌延地域の地質環境に及ぼす影響についてみると、2003年十勝沖地震(M8.0)の発生前後には、震央距離が400km以上あるにも係わらず、幌延町内の地下水水圧やGPS観測データに変化が認められた[核燃料サイクル開発機構(2004)]。これは、震央距離が遠くとも、太平洋側で発生する地震は幌延地域の地質環境に影響を及ぼすことを示している。

そこで、本論では、18世紀半ば以前の北海道において数少ない文献史料の一つであるアイヌの口碑伝説や歴史記録を対象として地震に関する記録を収集し、それら記録が過去に地震に襲われた可能性を示すものかどうかの検討を行うとともに、その検討結果に基づき、アイヌ文化期とそれ以前の時期における地震活動について考察する。なお、江戸幕府により建立された蝦夷三官寺(有珠の善光寺、様似の等澗院、厚岸の国泰寺)には、1804年の建立以来、住僧・役僧が書き継いだ膨大な量の日鑑記(寺務日誌)が残されている[佐々木・他(2005)など]。それらを対象とした地震に関する記録については、別に稿を改めて述べることにする。

## §2. 研究方法

紀元前より続く縄文文化の時代の後、北海道では本州とは異なる独自の文化の時代が始まった。すなわち、続縄文時代、オホーツク文化期、擦文文化期、

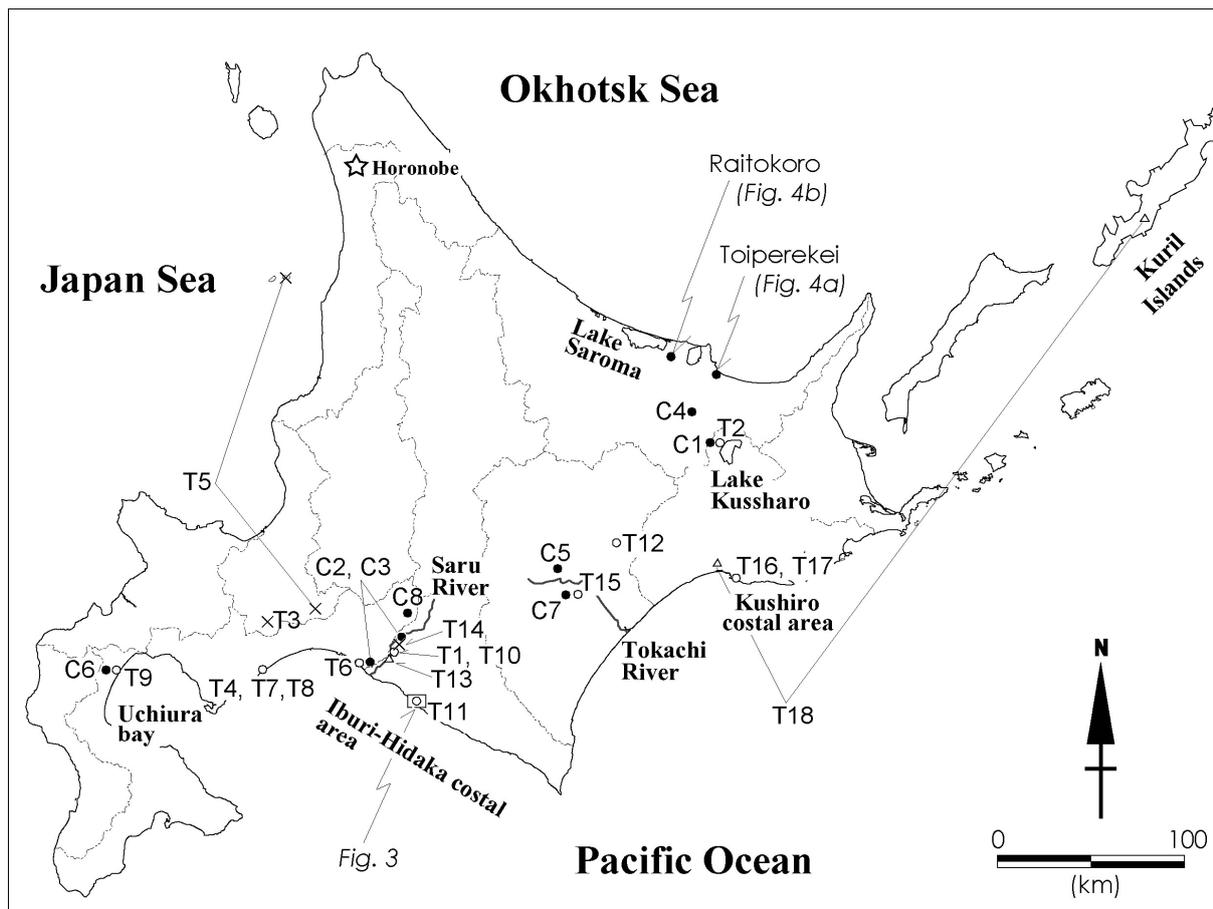
そしてアイヌ文化期である。ここで議論する約12・13世紀以降のアイヌ文化期[右代(1991)、菊地(1995)など]になると、本州との交易・交流やサハリンを経由した大陸との交易・交流が盛んとなり、擦文文化期の土器や竪穴式住居は姿を消すとともに、鉄鍋や平地式住居(チセ)、および炉を取り入れた新しい文化へ変容していったと考えられている。アイヌの人々は文字を持たなかったため、当時の歴史を知ろうとすれば、数少ない和人による記録(松前藩の記録や和人による蝦夷地探検の記録など)に頼ることが普通である。しかしながら、アイヌの人々は口碑伝説という形で各地に様々な言い伝えを残している。これらの中には、自然災害について語っているものも少なくない。とりわけ、20世紀の初めには、アイヌの古老らから多くの口碑伝説の収集が行われている。本論では、それら文献史料から、北海道における地震に関する記録を収集した。

アイヌの口碑伝説の引用にあたっては、できる限り米田(1995)のまとめに従うこととした。米田(1995)は、アイヌの伝承利用にあたっては、以下のようなまとめをした上で、関連した諸科学を取り入れシステムティックな研究が必要とした。すなわち、

- 資料としての位置づけには慎重さが要求され、歴史的事実を結びつけるためには緻密な検証作業が不可欠である。
- できるだけ一次資料としてのアイヌ語原文に立ち戻る。それが不可能な場合、その日本語の訳文が原文に対してどのように立脚し、どの程度の距離を持つものか把握する。
- 一地域一個人の伝承をアイヌ社会全体に容易に一般化すべきではない。

である。本論では残念ながらアイヌ語原文に当たることはできなかった。そこで、できる限りアイヌ語の聞き取りを行った人物が記載した資料(二次資料)にあたることとした。資料の中に口碑伝説をどこの誰から収集したのかが、分かるものについては、できる限り明示した。引用にあたっては原文に忠実に従ったが、印刷の都合上変換できない漢字は筆者が容易な漢字に変換した。また、津波に関するアイヌの記録の文献調査[高清水(2005a, 2005b)]と同様に、本論で最も重要な点は、「過去に地震が起こった可能性がアイヌの口碑伝説や記録に残されていたかどうか」であるので、口碑伝説それ自身の内容が事実かどうかを検証するものではない。

次に、地震に係わる内容が記されているアイヌの口碑伝説の収集された地域について、1)地質学的に地震が生じる地域であるか、2)アイヌ文化期以降の歴史時代においても地震を被っていたか、などを検討した。さらに、3)歴史時代の地震において観察された自然事象がアイヌの口碑伝説から読み取れるか、などを考察したうえで、「過去に地震が起こった可能



第 1 図 北海道における地震に関するアイヌの口碑伝説のある場所と地震イベントの可能性. ○: 可能性あり, △: どちらともいえない, ×: 可能性なし. 黒丸(●)は, 地震に関するアイヌの儀式, 教えおよび地名がある場所. 図中の数字は, 第 3 章および第 1 表に対応.

Fig. 1 Locality map of the Ainu records on earthquakes in Hokkaido. ○: Places related to past earthquakes. △: Places where are partly related to past earthquakes. ×: Places where are not related to past earthquakes. ●: Places where are handed down orally the Ainu ceremony, lore, and place-name related to past earthquakes. Numbers in this figure are corresponded to chapter 3 and table 1.

性がアイヌの口碑伝説や記録に残されているかどうか」を評価した. なお, アイヌ文化期以降の歴史地震については, 宇佐美(2003)および総理府地震調査研究推進本部地震調査委員会(1997)などを参照した.

### §3. 地震に関するアイヌの口碑伝説と歴史記録, 儀式および地名

以下に述べる各節において, アイヌの口碑伝説と歴史記録を引用し, 地震イベントの可能性を評価する. 各項の表題は, これらの文献史料の表題および史料中の文言をそのまま使用した. また, 地震の地域性を検討する観点から, 各地のコタン(アイヌ語で, 部落や村の意[知里(1956)])で伝えられている地震に係わる儀式や教え, アイヌ語地名についても記す.

第 1 図に, それら口碑伝説のある場所, 儀式や教

えの伝わっていたコタン, およびアイヌ語地名の場所を示す.

#### 3.1 アイヌの口碑伝説

##### (T1) 『世界はアメマスの上につくられた』

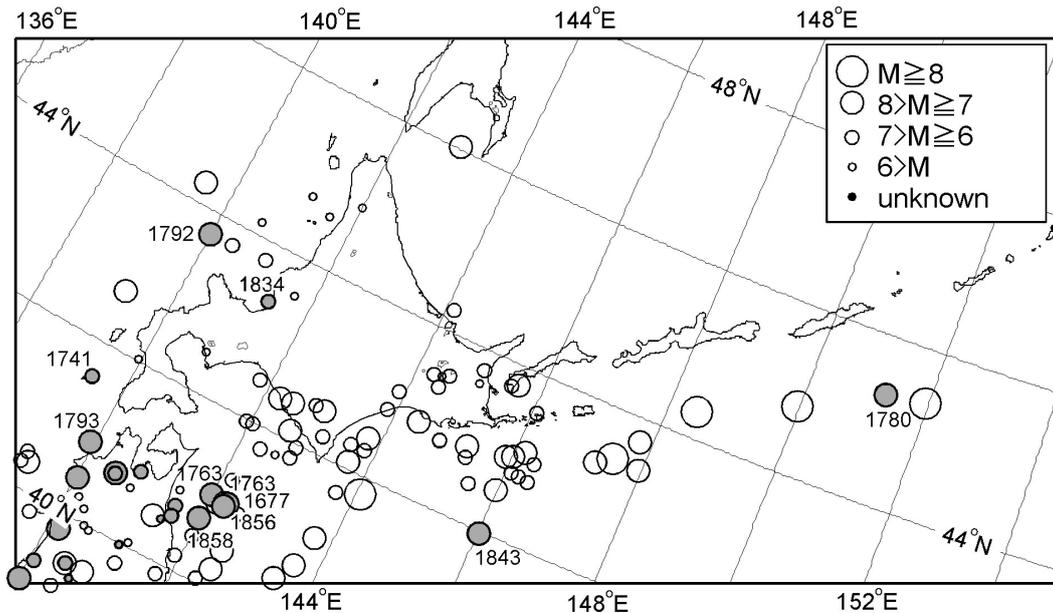
この口碑伝説は更科(1981)に記録されている.

「国造神が天から世界を創るのにおりてきた.

「さてさて、どこさ陸をつくるべ?」(中略)

国造神が泥海の中のかたいところだと思って島をつくったところは, 実は大きなアメマスの背中の上だった. アメマスがうっかり睡っているうちに, どっしりと島を背負わせられてしまったのだ.

アメマスはすっかりおこって, 大あばれをやるので, 地震が起こった. 国造神も失敗したのに, すっかりこまってしまって, アメマスを押さえるために二柱の神さ



第 2 図 北海道周辺における歴史時代の被害地震分布[宇佐美, 2003 による].

グレー丸(●)は 1872 年(明治 5 年)以前, 白丸(○)は 1873 年(明治 6 年)以降の被害地震をそれぞれ示す. 黒丸に添えられた 4 桁の数字は, 各々の被害地震が発生した年代を示す.

Fig. 2 Epicenters of destructive earthquakes in and around Hokkaido, after Usami (2003).

Solid gray circle; before 1872, open circle; 1873 or later. A subscript on solid circle indicates the age of destructive earthquake.

まを地上におろして、アメマスの右と左とに一人ずつ置いて、魚があばれないように押さえさせた。(中略)

一方が食事をしていると、その隙をみてアメマスがガバガバとあばれる、そうすると大地震になる。それで神様は腹へったときも片手で魚を押さえつけて、泥だらけの片手で食べ物を口に運ぶよりない。でもそんなときを狙ってはアメマスはあばれる。それでこの世からはなかなか地震がなくなるのだ。

こいつがまたときどき海の水を呑んだり、吐きだしたりする。(中略)

体の具合がよくなくて、機嫌が悪いと、ガツプリと大口をあけて水を呑んで、ゲーッとほきだしたりすると大変だ、大津波が起きて部落でも何でもさらって行ってしまう。(日高平取町二風谷・二風ニスクレックル老伝承)」

この地域の被害地震として、太平洋沖合で発生した 2003 年十勝沖地震(M8.0)や 1952 年十勝沖地震(M8.2)などがある。さらに日高地方南部から浦河沖までは地震活動が活発であり、M8 程度の地震こそないものの、1982 年浦河沖地震(M7.1)や 1981 年日高支庁西部の地震(M7.1)など 1930 年以降でもいくつかの被害地震(M6~7)が発生している[総理府地震調査研究推進本部地震調査委員会(1997), 宇佐美(2003); 第 2 図]。よって、この地域では過去においても地震が頻発したことが推測され、この地域のアイヌの人々は、地震の原因をアメマスに例えて伝えたと考えられる。

えられる。

「アメマスが暴れると地震になるため、アイヌはそれを退治する」という伝説は、道内各地に知られている[更科(1968)]。また、地震を起こす魔物はアメマスなどであると想像されているが、はっきりと正体を想像しない地方も多い[アイヌ文化保存対策協議会編(1969)]。本論の文献調査でも、アメマスがカジカや黒い魚、アカエイなど多様に変化していた。そこで、このような伝説をここでは“アメマス伝説”と呼ぶことにする。

## (T2) 『屈斜路湖の中島と大鯨(アメマス)』

この口碑伝説は更科(1955)に記録されている。

「屈斜路湖の中島はもと現在の奔渡のところにあった山であった。ところがこの湖に昔大鯨が住んでいて、頭は沼の上手の岩のように水の上にまで現われ、尾は釧路川の出口のあたりにゆれ、脊鱗は湖上に現われて天の日にこげ、腹鱗は湖の底の石にすれているという大きなもので、湖を渡る舟でもあると波を起して舟をくつがえして人をおぼらせ、退治に行った神々も寄せつけないというおそろしい魚であった。

或るときそれをききつけたアイヌの英雄オタシントクル(歌棄人)が、鉾をもってこれを退治に来て、みごとに大鯨の目玉を突いた。(中略)

大鯨も必死であばれたためについに山が抜け、湖の中にくずれ込んでしまった。そのため鯨は山の下に

なって動けなくなってしまうが、その山が現在の中島であり、山の抜けた跡に水がたまったのが、奔渡(小さい湖)であるという。

現在でもこの地帯で時々地震が起るのは、山の下になった鯨がまだ死にきれずにあばれるから起こるのだろうという。(弟子屈町屈斜路湖 弟子カムイマ老伝)」

いわゆる“アメマス伝説”の一つである。この地域の被害地震として、1938年に屈斜路湖付近で発生した屈斜路湖地震(M6.1)があり、その後もいくつかの地震(M5~6)が発生している[総理府地震調査研究推進本部地震調査委員会(1997), 宇佐美(2003); 第2図]。よって、この地域では過去においても地震が頻発したことが推測される。アイヌの人々は震源地付近であったろう屈斜路湖において、アメマスが動き地震が発生したと考えたのであろう。

### (T3) 『支笏湖の鯨(アメマス)伝説』

この口碑伝説は更科(1955)に記録されている。

「大昔支笏湖に大きな鯨がいて、それがあばれると島がゆれて地震になるので、人間の祖先のオアイムルシクルがそれを退治するために出かけ、魚扱で魚を突くことができたが、魚の力が強くてついに魚に負けて湖の中に引き込まれて死んでしまったので、この地上にすることができなくなり、妻と二人の子供を残して天に帰ってしまった。それを苦にして子供達の母親もまた天に帰ってしまったので、幼い姉と弟と二人だけが残された。(後略)(美幌町 菊地クラ姥伝)」

いわゆる“アメマス伝説”の一つである。この地域では、浅い小さな地震(M4以下、深さ30km以浅)が発生しているものの、最近の被害地震は報告されていない[総理府地震調査研究推進本部地震調査委員会(1997)]。しかし、支笏湖は樽前山や恵庭岳などの活火山に囲まれており、樽前山周辺では2003年、恵庭岳では1981年に火山性の群発地震(有感)が報告されている[気象庁(2005)]。よって、この地域では過去において小規模の地震が頻発したことが推測され、この地域のアイヌの人々は、地震の原因をアメマスに例えて伝えたと考えられる。

### (T4) 『鯨(カジカ)』

この口碑伝説は更科(1963)に記録されている。

「鯨ってやつは海や川ばかりでなく、どこにもいるもんだ。

土の底にもいるし、夜の天にある天の川にも棲んでいる。あいつはなんでも食うんだ。川の石まで呑むことがあるが、魚なら何でもかんでも、おかまいなしに呑んでしまう。天の川にいる奴は毎日鳥ばかり食っているんだ、餌の鳥がなくなると野郎おこってあばれるんだ、そうすると大地震になる。

土の中の大鯨はフシリコロエツケウチェブ(島を支

配する腰骨魚)といって、こいつも動くとき大地震になる。だから地震がおきたら、火箸を爐の中にさして「こら！あんまりあばれると腰に刺さるぞ」というんだ。(胆振虻田、遠島タネランケ姥伝)」

いわゆる“アメマス伝説”の一つで、アメマスがカジカに変化したものである。同様の口碑伝説は白老でも伝わっている[アイヌ文化保存対策協議会編(1969)]。この地域の被害地震として、2000年有珠山の噴火に伴う地震(M4.3)や1910年有珠山周辺の地震(M5.1)などがあり、火山性の群発地震が頻発に発生している[総理府地震調査研究推進本部地震調査委員会(1997), 宇佐美(2003); 第2図]。よって、この地域では過去においても地震が頻発したことが推測され、この地域のアイヌの人々は、地震の原因をカジカに例えて伝えたと考えられる。

### (T5) 『焼尻島漂着伝説』

この口碑伝説は更科(1955)に記録されている。

「昔、千歳の山の中で大陥没が起きて、そのあとに一夜のうちに大きな湖ができた。その時の激動で太平洋に津波が起き、千歳附近はその津波のために洗いさらわれたが、千歳神社のところにあつた山が津波のために切れて流され、海に漂い出て、流れ流れて、ついに遠く天塩の海中にまで行って止まった。それが今の焼尻島であるという。

この時山の流れて行つたあとが溝になつて江別川が出来たのであると。(白野夏雲「沙流土人間答の記」)

この伝説は、千歳神社のそばを流れる江別川(現千歳川)の源流の支笏湖で起きた伝説と考えられるが、地震と津波の内容は現実的ではない。また、北海道廳編(1940)の「フレイドヒ」や更科(1955)の「利尻島漂着伝説」など、似たような話がいくつか知られており、それらの伝説が変化したもの一つと考えられる。よって地震の記録は物語上の作り話であろう。

### (T6) 『大魚』

この口碑伝説は北海道教育庁社会教育部文化課編(1989)に記録されている。

「これは孫じいさんに聞いた話だが、浜厚真(?)の方に大きな沼があつて大魚がおり、それが動くとき地震が起きるのだと言う。今は神様に頼んで杭につないでもらっているのが大地震にならないのだ、と聞かされた。(鶴川汐見、新井田セイノ氏)」

いわゆる“アメマス伝説”の一つで、アメマスが大きな魚に変化したものである。この地域の被害地震として、太平洋側沖合で発生した1952年十勝沖地震や1856年十勝沖地震のほか、陸域では1981年日高支庁西部の地震(M7.1)および1982年浦河沖地震(M7.1)などがある。M8程度の地震こそ発生した記録はないものの、1930年以降M6~7程度の地震が何

回か発生している[総理府地震調査研究推進本部地震調査委員会(1997), 宇佐美(2003); 第 2 図]. よって、この地域では過去においても地震が頻発したことが推測され、この地域のアイヌの人々は、地震の原因をアメマスに例えて伝えたと考えられる。

### (T7) 『アカエイ』

この口碑伝説は犬飼(1943)に記録されている。

「胆振国白老ではウバシクマ(口碑)により地震を起こす魔物の正體は魚のアカエイ即ちアイヌ名でアイコロチップであると云う。この魚はその尾先に毒を有し、アイヌはこの毒を毒矢の毒に用いたこともあるから恐る可き動物としてゐる。土の中に棲むアカエイが千島(イモツク)を飲もうとして暴れて北海道に地震が起ると云はれる。(白老, 宮本氏)」

いわゆる“アメマス伝説”の一つで、アメマスがアカエイに変化したものである。宇佐美(2003)によれば、1873 年以降、白老東方の苫小牧からえりもにかけての太平洋沿岸では、10 ほどの被害地震が発生している。このため、規模の大小はあれ、当時も胆振地方において地震が多数発生していた可能性が考えられる。当時地震の多かったであろう胆振地方では、口碑が広まり多様性が生じたのではないかと考えられる。

### (T8) 『悪魔』

この口碑伝説はアイヌ文化保存対策協議会(編)(1969)に記録されている。

「白老コタンでもある家系では、地震は悪魔が太陽を一呑みにしようとし、その時に大地を抱えている神が太陽を救うために、からすを捕らえて悪魔に投げつける、その時大地を抱えていた手がゆるんで地震がおこると云い伝えているのもある。」

この“白老のある家系”では、神が悪魔にカラスを投げつけるときに、大地を抱えた手がゆるむため地震が生じるものとされている。また、胆振から内浦湾沿岸付近の海域では、規模の大小はあるものの、アイヌ文化期以降の歴史時代において多数の地震が発生している(第 2 図)。このことは、白老の“この家系の人々”が過去に経験した地震を伝えていたことを示している。

### (T9) 『魔物』

この口碑伝説は、アイヌ文化保存対策協議会編(1969)に記録されている。

「ここでは地震の原因は天にいる悪神のポロチマカというかじかの魔物が、いつも暴れだそうとしているのを、善神がその頭に金属の串(カニウライニ)を刺して左手で押えつけている。この神はいつも笠をかぶったままで右手で食事をする。若し左手をゆるめるとポロチマカが暴れて地上に地震がおこるといふ。その時は長万部でも刃物を爐に刺して、イッケウ、イッケウと連

呼するが、ポロチマカを制する神に見習って刃物で刺すのだと信じられている。(長万部コタンの伝説)」

前項と同様に、この口碑伝説は、長万部のコタンが地震をこうむった可能性を示すものであろう。また、魔物が暴れて地震が起きないように、神が魔物を押さえつけるという内容は、いわゆる“アメマス伝説”に類似している。

### (T10) 『小さい黒い魚』

この口碑伝説は北海道教育庁生涯学習部文化課編(1998)に記録されている。

「平取地方の云い伝えでは、地震で地割れが出来た時、水が湧き出ることがあって、その中に小さい黒い魚がいるから、発見次第急ぎその魚を地割れの中にもどし、その付近の土を足で割れ目に踏み入れるという。この黒い魚が地震をおこす魔物に関係すると考えられている。地割れを発見したら、荒削りの板片を何枚も刺しこんで、穴を塞ぐこともあるが、家系によってまじないにいろいろの差がある。」

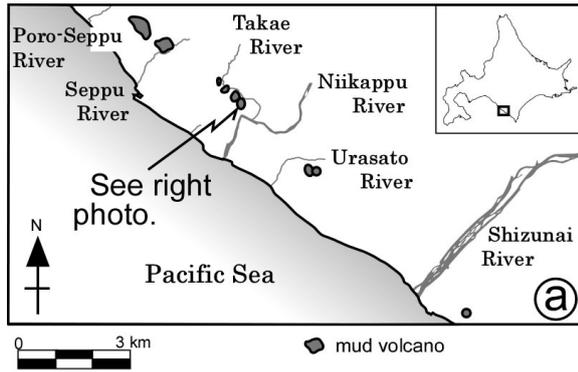
この口碑伝説には、地震による地割れや液状化に伴う噴水、噴砂の様子が記されている。今井・角(1957)によると、平取付近には沙流川により形成された礫・砂・粘土および火山灰からなる河成段丘や、火山灰質土や粘土を含む沖積低地が分布している。このような地質条件では、地震動による地割れ、噴砂、および噴泥が生じる可能性がある。よって、過去の地震で生じたそれらの自然事象が、口碑伝説により伝えられていると考えられる。

### (T11) 『黒い魚』

この口碑伝説は、更科(1955)に記録されている。

「新冠町タカイサラという丘の上は現在も湿地になっているが、昔はここが沼であってそこに黒い魚がいて跳ねていたという。それが跳ねるとどうなるのか意味はわからないが、昔地震の時に破裂したところだという。(新冠町泊津 胡桑野多作老伝)」

この口碑伝説に出てくる“タカイサラ”とは、現在の新冠町高江のことである。高江は新冠川河口にあたり、沼地を含む沖積層がひろがっている。また、この地域には、陸上に泥火山が分布している[佐々(1954), 千木良・田中(1997); 第 3 図]。泥火山とは、地下から噴出した泥が堆積して形成された小山であり、地下深部における間隙水の異常高圧が開放されて形成される。千木良・田中(1997)によると、新冠には 9 個の泥火山が確認されている。1894 年以降の文献史料に基づくと、浦河もしくは新冠で震度 5 以上の地震が観測された際に、それら泥火山のいくつかは亀裂の発生や噴泥、ガス湧出などの活動を行った[千木良・田中(1997)]。このため、過去においても同地域で震度 5 以上の地震が観測された場合には、噴泥などの現象が生じたであろうと推測される。「黒い魚」とは、噴出し



第3図 (a) 新冠周辺における泥火山の分布[千木良・田中(1997)を簡略化].  
(b) 写真中央の小山が泥火山(写真撮影, 田近 淳氏).

Fig. 3 (a) Mud volcanoes in and around the Niikappu, simplified from Chigira and Tanaka (1997).  
(b) Mud volcano is in the center of photograph (photographer, J. Tajika).

た泥の例えであろう。また、「黒い魚」の跳ねた沼を「昔地震の時に破裂したところ」として言い伝えていることは、地震の際に生じた噴泥をアイヌの人々が目撃した可能性を示している。よって、本口碑伝説が伝わっている地域もしくはその周辺域が地震を被った可能性は高いと考えられる。

### (T12) 『鴉(カラス)』

この口碑伝説は、更科(1968)に記録されている。

「地震で土が裂けると真っ黒い小魚と地獄にいる鴉がでてくる」

十勝本別と日高新冠に伝えられている口碑伝説である。工業技術院地質調査所(1971)によると、十勝本別付近には利別川もしくは十勝川により形成された礫・砂・粘土および火山灰からなる河成段丘や、泥炭を含む沖積低地が分布している。このような地質条件では、地震動により噴砂もしくは噴泥が生じる可能性がある。また、前項の通り、日高新冠では過去の地震発生時に噴泥などを生じた可能性が高い。このため、「地獄にいる鴉」とは、地震の際に生じた噴砂もしくは噴泥の例えであろう。よって、前項と同様に、それらの事象が、口碑伝説により伝えられていると考えられる。

### (T13) 『沙流川の河童』

この口碑伝説は、更科(1971)に記録されている。

「昔ある酋長が山猟に出ようとして留守中の薪を沢山とって運んでいた。(中略)

「こんなとき河童が来て手を引いて起こしてくれるといいがな」

と口走るとこつぜんと異形の者が現れて酋長の手

を引き、何の苦もなく起きあがれたので、酋長は「家に行って休もう」と家に誘った。(中略)

やがて夜になり酋長達が煙草を吸おうとすると、急に睡気に襲われて寝込んでしまった。そこへ河童が大声で

「早く村中の者を此の家に呼び集めろ」

といて酋長を呼び起こしたので、酋長はなかば夢ごちで部落へその話を伝えると、村中の者があわてて酋長の家に駆け集って来たが、いずれも河童の姿を見ているうちに睡気に襲われて寝入ってしまう。村中のほとんどが酋長の家に入ったので酋長が戸を閉めようとする、遠くで雷のような響がして地震のようにあたりが揺れ動き、戸外の闇の中からは集まらなかった家の女子供や老人の悲鳴が聞えていた。やがて雷鳴も地震も凄じい悲鳴もやんだが、酋長の家に集った一同は同じ夢を見ながらねむりつづけていた。その夢の中で河童がいうのには、

「俺はこの村の榛林を看守する為に天からつかわされた河童神であるが、今夜他の村から此の村を夜襲してお前達を皆殺しにしようという企てがあったので、それを知らせる為に酋長の荷物を重くしたりしてここに入り込み皆を集めて難を避けさせたのだ。」(中略)

酋長はその煙草入を恭しくおし頂いて納め外に出て見ると、老人や女子供など集まらなかった人達は襲来軍の為に虐殺され、その死屍が無慚に散らばっていた。(後略)(吉田巖氏輯「人類学雑誌」二九卷一〇号所載)

現在の復元されたアイヌ文化期の住居(民家)であるチセの特徴として、平地式、掘立柱、室内の中央にいろりをもった長方形平面の母屋、小規模の付属屋

(セム)、茅を材料とする段藁葺き寄棟屋根、内側に傾く茅壁などが挙げられ、耐用年数の短い構造が採用されている[小林(2000, 2004)]. このため、もし仮に、地震による住居の倒壊で人的被害が生じたとしても、口碑伝説にあるような被害は生じなかったであろう。また、「地震のようにあたりが揺れ動き」とある。よって、本口碑伝説は、夜襲による地響きを地震に例えて表現したものと考えられる。但し、地響きを地震に例えていることから、この口碑伝説が伝えられていた地域は、過去に地震を被った可能性があるものと推測される。

#### (T14) 『文化神の投槍が破った山』

この口碑伝説は更科(1971)に記録されている。

「文化神オキクルミが沙流川の支流貫別川の奥のエマニチヌプリ(焼串山)の上を居城にしていたとき、そこから額平川の支流のドレンナイ(うばゆりある沢)の山をめがけて、投槍の練習をやっていると、槍がドレンナイの山にあたらずにそれて、沙流川の川向いのオプシヌプリ(そこを破った山)という山を突き抜いて大穴をあけてしまった。その穴は地震のために上がくずれおちて今はへこみにしか見えていない。(平取町二風谷 二谷一太郎老伝)」

この伝説にあるオプシヌプリは、平取町二風谷にある。この山は、ぽっかり穴があいたように見える「くぼみ」を持つ。この「くぼみ」は、明治31年の水害まで上部がつながって穴のようになっていたが、大雨のときに上部が落ちて現在のような「くぼみ」になってしまったと言われている[二風谷部落誌編纂委員会編(1983)]. よって、風水害により侵食され、穴が崩壊して今のくぼみができたと考えられるが、穴の崩落と地震との関係は不明である。また、北海道内にはこれ以外にも山と山とが槍投げを行ったという多くのアイヌ伝説が知られており[更科(1971), 土屋(1975)], 本口碑は、それらの伝説の変化形の一つとして考えてよいだろう。

#### (T15) 『鯨(クジラ)』

この口碑伝説は北海道教育庁生涯学習部文化課編(1998)に記録されている。

「ライ フムベ オタオロ エク チク オンネ シリス ム エキ ナ ray humpe ota or ekcik onne sirsum ek(i) na 「死んだクジラが砂浜に上がったら大地震が来る」という言い伝えがあった。昭和28年、十勝沖地震の時、その前にクジラが上がった。(幕別、安東ウメ子氏)」

十勝沖ではアイヌ文化期以降の歴史時代において多数の地震が発生しており、またそれら地震の発生間隔は100年オーダー以下である[宇佐美(2003)など、第2図]. このため、アイヌ文化期とそれ以前の時代において、口碑伝説の伝えられた太平洋沿岸付近の幕

別が地震を被った可能性は高いであろう。

地震発生前に生じた事象には様々あるであろうが、特にアイヌの人々にとって海からの貴重な賜物である死んだクジラが浜に打ち上げられたことは、アイヌの人々にとって深く印象づけられ、口碑伝説として伝えられたのであろう。

#### (T16) 『クシロの津波』

この口碑伝説は北海道廳(1940)に記録されている。

「私(春採部落の古老トシエランクル)の父が若かった頃、クシロに大津波があつた。コタンの人々が漁のために沖へかけた網が、波のために陸へ打上げられ、ホンノツエト(今の休み坂付近)の岩かげの中段に引つかかつたりした。

かういふ大津波は、むやみにあるものではないが、先祖のいひ傳へによれば地震がさきに来るものだ。大地震があつたら早く高臺に逃げるものだ。高臺に逃げても笹地をえらべ、笹は根深く長く張つて、中々地が裂けない。

この時の大津波も大地震がさきに来て、大地が裂けて水が迸り出ると、中からフナの子のやうな魚がとびだしたが、大事の場合そのフナがどうして出たか、どうなつたかわからない。

津波はハルトリのトウ(沼)を上つて、チヤシの右手を左に向つて進み、今の湖畔病院の前からモヤシリに進んだ。またその一つはトイトウ(今の太平洋炭礦附近)の奥にぶつかり、更にフレムサの小川を越したといふ。もう一つオニツブから上つた波は、イカルル(今の築港正門前)を越えて、フレナイプトに出たといふ。ボンノテト(休み坂附近の崖)はその際波の打ちつけたところである。」

この口碑伝説の地名に基づき、高清水(2005b)は海岸線から3kmほど津波が遡上したと考察している。この口碑伝説は、津波来襲前に地震が起きて噴砂が発生したことを過去の地震で経験し、津波が来た際には高台へ逃げるという手段をアイヌの人々が知っていた可能性を示している。

#### (T17) 『津波と春採湖』

この口碑伝説は、北海道廳(1940)に記録されている。

「昔、大地震があつたので、アイヌたちは大地震の後には必ず津波があると、エカシの言い伝えがあるから、早く逃げろと行って、皆丘の上に逃げた。間もなく沖の方がもりもり高くなって、大波が押し寄せて春採湖に入ってきた。ちょうどイタンギ(椀)に水を入れたように、見る見る湖は一ぱいになり、一番低いオンネパラツコツからあふれてモシリヤに流れたという。(山本太吉談、佐藤直太郎聞書)

〈参考〉オンネバラツコツは、オンネ(大きい)、パラ(広

い)、コツ(窪み)で、ウイライケチャシ(現柏木小学)の東側の北西部星園高校の西側に至るところは、春採湖の周辺の最も低いところで、恰も椀の一部が欠けたような格好をしていたところである。現在は道路が出来て昔のおもかげはない。

モシリヤは現城山町の旧地名である。」

前項とほぼ同じ内容である。北海道東部太平洋沿岸では、2003年十勝沖地震(M8.0)や1973年根室半島沖地震(M7.4)など太平洋プレートの沈み込みによるM7.5~8クラスの地震が繰り返し発生しており、各震源地の地震間隔は平均77.4年間隔と報告されている[地震調査研究推進本部地震調査委員会(2003)]。さらに、Nanayama et al. (2003)は、釧路市春採湖では過去7000年間の湖底堆積物中に津波による堆積物が17枚認められ、平均500年間隔で巨大な津波が繰り返し発生していると報告している。よって、これら地震常襲地域において、アイヌの人々が地震津波を経験した可能性は高いと考えられる。

### (T18) 『鶴が野生になった由来』

この口碑伝説は、山本タスケ著『阿寒国立公園とアイヌの伝説』[佐藤(1968)]に記録されている。

「始祖キラウコロエカシから三代の後まで、トオヤの一族は平和でした。(中略)

始祖より三代目をカネキラウコロエカシ(金の角をつけて居たと言う)と呼んでその武勇を広く蝦夷地に聞えておりました。その頃釧路の東方にクルンセと言う勢力強い国が大軍を起し、クナシリ(国後島)を攻め、ハボオマイ(歯舞村)ネムオロベツ(根室町)方面を一気に攻め落とすと、西へ西へと攻め込んできました。

釧路川附近の各酋長は協議の結果一団となり、進みくるクルンセ軍を防ぐこととなり、カネキラウコロエカシは挙げられて、釧路軍の指揮者となったのです。(中略)

チャシの人々も戦いの危急の場合、鶴にかまって居られず、はげしい戦は再び三年も続いたのです。大軍を頼むクルンセ軍に喰い止められて、一步も釧路領に攻め入る事が出来ないで居るうち、二年目の秋からクルンセ国一帯に、地震が続き山は噴火してその下に埋もる部落も数々ありました。三年目は地震が益々激しく大変な騒ぎです。

クルンセ軍も戦争どころではありません。今こそと勢を盛り返した釧路軍の為にクルンセ軍は散々に打ち破られ四散して戦は終わりましたが、クルンセの地震はいよいよ激しく、大地は裂けて海に沈み、海には陸が盛り上がり山となるなどしてついにクルンセ国は全滅しました。

この時の地震で今の千島が出来たと申します。(後略)」

クルンセ国は現在の千島諸島(くるせみ島)一帯を示している[山田(2000)]。千島列島には、太平洋プレ

ートの沈み込みで形成された成層火山やカルデラ火山など、陸上や海底に多くの火山が分布し、このうち32の火山には歴史時代(18世紀初頭~現在)に噴火記録がある[Gorshkov(1954)]。このような地域では、過去に火山活動と群発地震が同時に発生したことが容易に想像される。よって、アイヌの人々がそれらを経験したことを示すと考えてもよい。但し、大きな地殻変動や津波も記録されていることから、プレート境界型地震もしくは噴火による火山崩壊等に起因する地震が生じた可能性がある。

### 3.2 アイヌの儀式と教え

アイヌの人々は地震の原因について、地下にすむアメマスなどの魔物が暴れて出して起きると信じていた(いわゆる“アメマス伝説”)。これは、地下深くにすむ巨大ナマズが地震を起こすという江戸での言い伝え[宮田・高田(1995)]と似ている。1855年の安政江戸地震後には、いわゆる「ナマズ絵」が数多く流布した。この「ナマズ絵」は、地震を起こす大ナマズを常陸国(現在の茨城県)の鹿島大明神が要石で押さえるという言い伝えをもとに、想像して描かれた。

地震が発生した場合、アイヌの人々は地震を恐れて逃げるというよりも、地震を起こした魔物を退治する動作に出ることが各コタンで行われていた。それら儀式は、アイヌ文化保存対策協議会(編)(1969)に記録されている。各コタンによってやり方や言い方は異なるが、地震を起こす魔物が暴れるのを抑えようとする儀式であることには変わりがないようである。それらの儀式や教えが存在することは、アイヌの人々が過去に地震を経験していたことを示している。

よって、教えの伝わっている地域もしくはその周辺地域が地震を被った可能性はあるだろう。

以下に、文献調査から明らかになった各地の儀式の記録を示す。

#### (C1) 釧路の屈斜路のコタンの儀式

この地域の地震に関する儀式は、アイヌ文化保存対策協議会(編)(1969)に記録されている。

「地震がはじまると、家の中で男女共にマキリやタシロなどの刃物を抜き払い、炉の灰の中に突き刺して口々にイッケフ、イッケフ(腰、腰)と唱えながら前後に動かし、地中にある魔物の腰に刃物を刺して暴れると懲らしめる意味で、アイヌの威力を示すのである。地震がさらに激しくなると、危険を避けて屋外に出て、今度は地面に刃物を刺して、激しくなるほど力強く刺してイッケフを連呼する。この時はいかに寒空でも火を焚くことは絶対に禁じられる。地震がやや治まると大急ぎでイナウを作り、ヌササン(外の祭壇)に捧げ、コタンの長老たちが集まって、コタンコロカムイをはじめとし、諸々の神に向かってカムイノミをなし、このうえ激しい地震がおこっても、コタンに災害を及ばさない

ようをお願いをする。」

地震は地中にいる魔物によって起こるものであり、アイヌが魔物の腰に刃物を刺して懲らしめるという概念は、いわゆる“アメマス伝説”に類似している。また、地震の揺れが激しくなったら、屋外に出て火を焚くことは絶対に禁じられているという概念を釧路から屈斜路のアイヌの人々が持っており、かつ儀式として伝えられていることは、彼らが被害地震を熟知していることを示しており、大変に興味深い。

### (C2) 鶴川から平取地方のコタンの儀式

この地域の地震に関する儀式は、アイヌ文化保存対策協議会(編)(1969)に記録されている。

「地震の時は屋外にとび出して、婦女子は穀物を搗く杵(ユタニ)を持って、地面を搗くように叩き、イッケラリー、ホーイ、ホーイと繰り返し叫び、男はエムシ(刀)、タシロ(山刀)、マキリ(小刀)などを抜身にして地面に刺し、イッケアトウエ、エイタカシュ、アエオマ、すなわちおとなしくしないと腰を突き刺すぞと怒鳴る。このような時の呪文はただし個人によって多少異なり、イッケフコツ、イッケフコツ(腰を刺す)という者もあるが、腰を刺すという意味は共通である。また婦女子などで、コタンを離れてよそに出て地震に遭った時は、附近の高い山の方に向かって、片手に杖をつき、片手を高く挙げ、次にその手を胸のところにおろす動作を繰り返しながら、チコロコタン、カムイウタラ、(コタンを離れてここに来て、この災害に遭ったから、多くの神々よ見守ってくれ)、ホーイ、ホーイと叫ぶ。」

この儀式も、刃物で地中を刺し、「おとなしくしないと腰を突き刺すぞと怒鳴る」ことによって地震を治めようとするものであり、前項の「釧路の屈斜路のコタンの儀式」と同様に、いわゆる“アメマス伝説”に類似している。

### (C3) 平取地方の言い伝え

この地域の地震に関する言い伝えは、アイヌ文化保存対策協議会(編)(1969)に記録されている。

「地割れを発見したら、荒削りの板片を何枚も刺しこんで、穴を塞ぐこともあるが、家系によってまじないにいろいろの差がある。」

この儀式は、前節(T11)項の『黒い魚』に関連した言い伝えであり、平取地方のアイヌの人々が、過去の地震で新冠の泥火山(第3図)に見られるような噴泥を経験したことが伺える。

### (C4) 美幌コタンの儀式

この地域の地震に関する儀式は、アイヌ文化保存対策協議会(編)(1969)に記録されている。

「美幌では、地震の時は、男たちは全然騒がず、女だけがマキリを爐縁の外側に刺してイッチケフ、イ

ッチケフと叫んで地震治めのまじないをする。」

この儀式も、刃物で地中を刺し、「おとなしくしないと腰を突き刺すぞと怒鳴る」ことによって地震を治めようとするものである。さらに、美幌では女性のみが地震止めのまじないを行い、男性はまじないに無関係だったと言われている[犬飼(1943)]。

### (C5) 十勝音更コタンの儀式

この地域の地震に関する儀式は、アイヌ文化保存対策協議会(編)(1969)に記録されている。

「十勝音更のコタンでは、男たちは家を堅固にするまじないとして、皆で家の中で梁にぶら下がり、次に刃物を爐の中の灰に刺して、イッケベクチュウ、イッケベクチュウと叫びながら刃物をぎりぎり動かす。」

この儀式には、家を倒壊から守るまじないと、地を刺して地震を止めるまじないが含まれている。アイヌの人々が過去に地震による住居の倒壊を経験していたことが伺える。

### (C6) 長万部コタンの儀式

この地域の地震に関する儀式は、アイヌ文化保存対策協議会(編)(1969)に記録されている。

「ここでは地震の原因は天にいる悪神のポロチマカというかじかの魔物が、いつも暴れだそうとしているのを、善神がその頭に金属の串(カニウライニ)を刺して左手で押えつけている。この神はいつも笠をかぶったままで右手で食事をする。若し左手をゆるめるとポロチマカが暴れて地上に地震がおこるといふ。その時は長万部でも刃物を爐に刺して、イッケウ、イッケウと連呼するが、ポロチマカを制する神に見習って刃物で刺すのだと信じられている。」

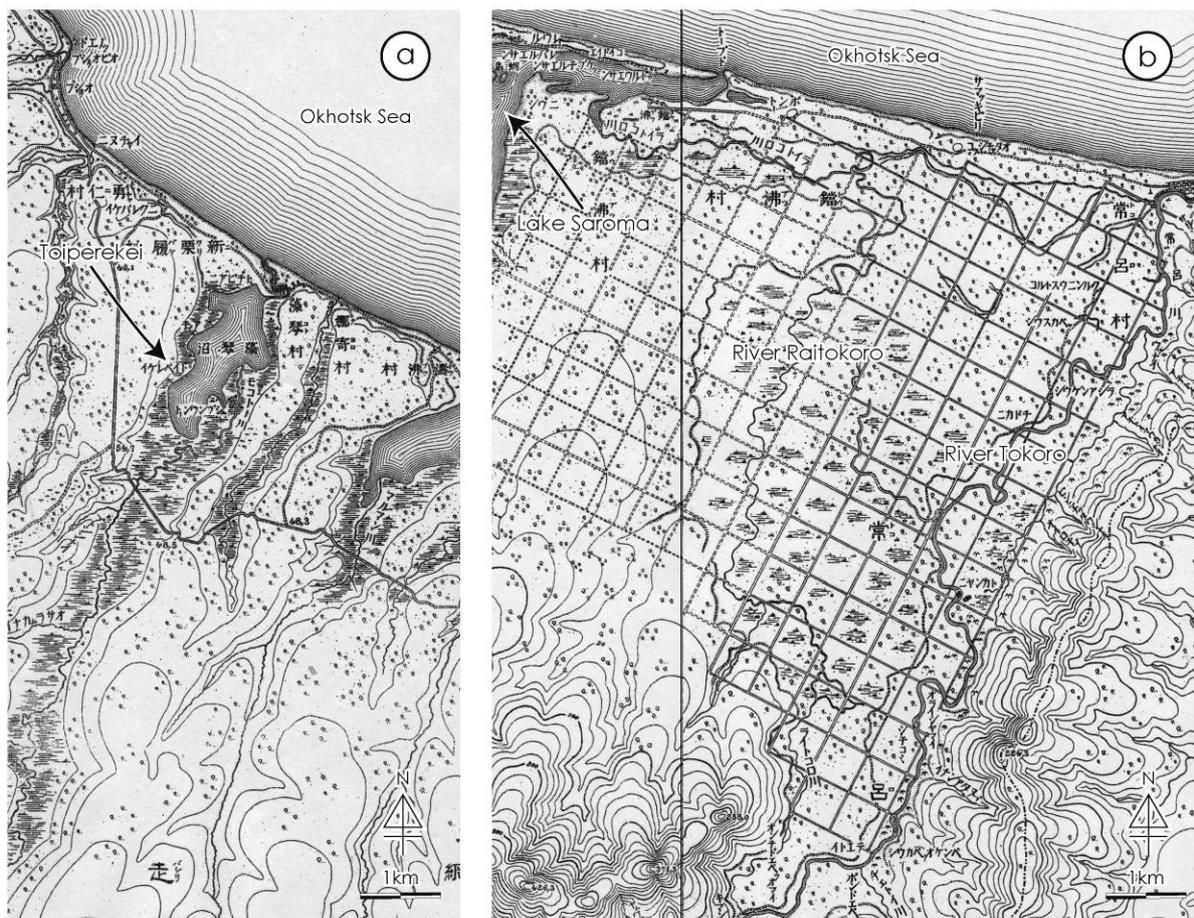
この儀式も刃物で地中を刺し、地震を治めようとするものである。さらに、この儀式に関連して、アイヌの人々は食事の時でも茶碗をおいたまま片手に箸を持ってつまみ食いすることを禁じている。これは、左手で魔物をおさえているため片手でしか食事できない神の所作を、人は真似てはならないという教えである[吉田(1984)]。食事という日々の生活の中に地震に係わる教えが認められることは、アイヌの人々が日々地震を経験していたことを示すと考えられる。

### (C7) 地震に関する教え1

この地震に関する教えは、北海道教育庁生涯学習部文化課編(1998)に記録されている。

「地震の時は大きな木の下に逃げろと昔の人は言った。だから私はスモモの木の下に走った。地割れしないからだと言う。板戸をはがしてその上に乗れともいう(幕別 安藤ウメ子氏)」

この教えは、アイヌの人々が地割れを伴うような被害地震を経験していたことを示している。



第4図 地震や崖崩れに関するアイヌの地名。(a) トイペレケイ, (b) ライトコロ。  
 (a) 陸地測量部発行北海道仮製五万分一図「濤沸沼」(明治三十年(1897年)版), (b) 陸地測量部北海道仮製五万分一図「常呂」および「鑑沸」(明治三十年(1897年)版)。  
 Fig. 4 Ainu place-names on historical earthquakes and landslides. (a) Toiperekei, (b) Raitokoro. Topographic maps are part of 1:50,000 topographic map “Toufutsuto” (a), “Tokoro” and “Tofutsu” (b) published by General staff office of Japanese imperial land survey on 1897.

### (C8) 地震に関する教え2

この地震に関する教えは、北海道教育庁生涯学習部文化課編(1998)に記録されている。

「地震の時祭壇の地面は割れないからそこに逃げると言われた(穂別富内 森本八重氏)」

前項と同様に、アイヌの人々が地割れを伴うような被害地震を経験していたことを示している。

### 3.3 アイヌ語地名

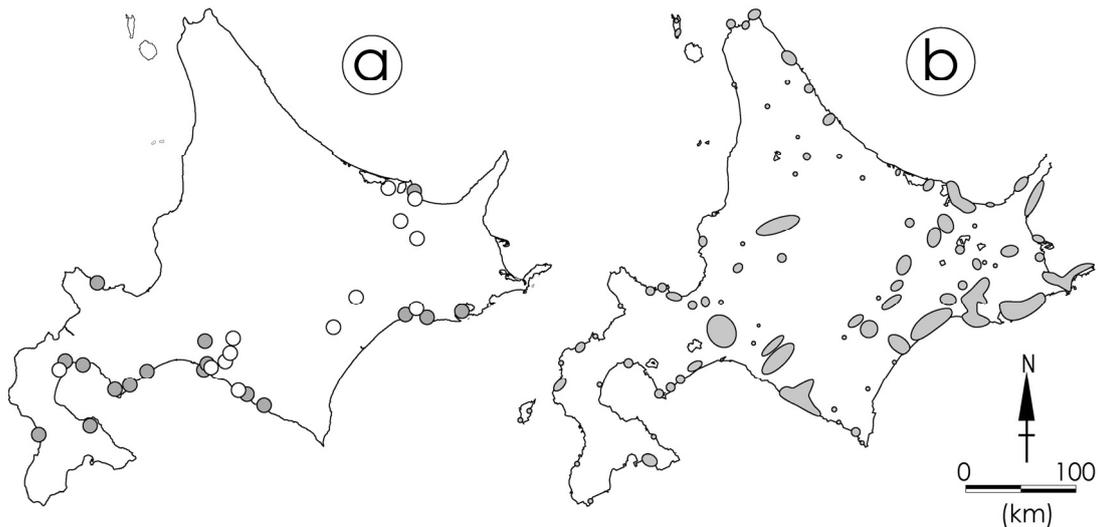
北海道の地名の多くはアイヌ語を起源に持つと言われている[山田(1982, 1983a, b, c)]. これらの地名には、地震や崖崩れに関連すると考えられるものがある。ここでは、そのような地名の例を2つ挙げる。

#### (G1) トイベケレウシ

このアイヌの地名に関する記録は、松浦武四郎による安政五年の調査記録『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌(上)』[秋葉(1985a)]に記されている。

「モコトウの沼の西岸也。五六丁にて其処に下る哉沼の端に出(た)り。其地名はトウを見るに明るくよく見ゆと云儀也。此辺崖の上雑樹原に樺・赤楊・桜多し。また躑躅も多し。扱沼の岸まゝを下るや、茅原蘆荻にて、わらんじのうら水に浸りぬ。しばしにて」

これは、松浦武史郎が釧路から阿寒、美幌を経て、現在の網走市藻琴地区の海岸へ至る調査の行程で、藻琴湖西岸の崖崩れであるトイペレケイ(土の・切れる・もの)を指摘したものである。アイヌ語の地名に崖崩れの自然災害を読み取れる貴重な場所である。地名に残るほどであるから、よほど大きな天災であったと想像できる。ただし、この崖崩れが地震によるものな



第5図 (a)地震および津波に関するアイヌの口碑伝説, 儀式, 教えおよび地名のある場所。  
 ●: 津波に関するアイヌの口碑伝説のある場所[高清水, 2005b], ○: 地震に関するアイヌの口碑伝説, 儀式, 教えおよび地名のある場所。  
 (b)チャシの分布[右代, 2000 による].

Fig. 5 (a) Locality map of the Ainu records on earthquakes and tsunami events in Hokkaido.  
 ●: Places related to past tsunamis. ○: Places related to past earthquakes. The localities related to past tsunamis are taken from Takashimizu (2005b).  
 (b) Distribution of Chashi simplified from Ushiro (2000).

のか, あるいは大雨や洪水によるものなのかは不明である。また, 武史郎は日誌の中でこの地名をトイベケレウシと記しているが, これはペレケ(“切れる”の意)をペケレ(“明るい”の意)と誤って記したものと考えられる(武史郎の聞き誤りか, 武史郎を道案内した者の聞き誤りかのどちらかであろう)。事実, 明治三十年(1897年)版の陸地測量部発行の北海道仮製五万分一図「濤沸沼」には, 藻琴沼西岸の地名に「トイベケレイ」と記されている(現在の地形図では確認できない)ことも, このことを支持している(第4図a)。

## (G2) ライトコロ

このアイヌの地名に関する記録は, 松浦武四郎による安政五年の調査記録『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌(中)』[秋葉(1985b)]に記されている。

「右の方中川なり。此川イハケシのかたえ行よし也。本名ライトコロのよし。其訳は死だトコロの川と云儀なり。此川昔しトコロの本川なりしが大地震有りて其川口うづもれ今は支流の様に成りしと。昔し此処よりトウフツのタイトコロえ此川切りて有りしと云伝ふ。扱此辺り河流追々早く成りたり。然し川巾はひろけれども寄り木多くして甚通り悪き処有。土地左りは惣て山也。右は平地多し。是より凡二十五六丁も未申の方えさして行に, 水は追々急流に成り, また左右の岸より倒れ木等多く船もはかどりがたし。こへて」

これは, 常呂(トコロ)川の支流であるライトコロ(死んだ・トコロ)川のことを松浦武四郎が記したものであ

る。常呂川は, 標高 700-200m の低山・丘陵からなる北見山地とその周縁丘陵をぬって北東へ流れ, サロマ湖東部の常呂平野を経てオホーツク海に注ぐ。ライトコロ川は, 常呂川が常呂平野へ出る辺りに位置する常呂川の支流である。

武史郎が記しているとおおり, 常呂川は昔, ライトコロ川を本流としていたが, 地震によりその河口が土砂で埋積し, 現在の常呂川が本流となったというものである。この地名に関しては, 伊藤(1983)や山田(1983a)にも同様の解釈がなされている。ライトコロ川は, 明治三十年(1897年)版の陸地測量部発行の北海道仮製五万分一図「常呂」および「鐺沸」に記されており(現在の地形図でも確認できる), サロマ湖へ合流する常呂川の支流として記されている(第4図b)。

## §4. 考察

前章では, 地震に関するアイヌの口碑伝説を18編, 儀式および教えを8編, およびアイヌ語地名を2箇所取り上げ, それらの記録が過去に地震に襲われた可能性を示すものかどうかについて評価した。その結果, “地震に襲われた可能性がある”と判断された地域は, 23, “地震に襲われた可能性が無い”と判断された地域は2, よく分からない地域は3であった(第1表)。

高清水(2005b)は, 北海道の太平洋沿岸域を襲った津波による堆積物の研究成果[添田・他(2004)など]を参照し, アイヌの口碑伝説と歴史記録から, 過去に津波に襲われた可能性のある地域を検討している。

第1表 地震に関するアイヌの口碑伝説、儀式、教えおよび地名のリストと評価。

Table 1 List of the Ainu oral traditions and historical records related to past earthquakes with its reliabilities.

(○:可能性あり, △:一部可能性あり, ×:可能性なし)

番号	地域	口碑名, 儀式, 教え および地名	引用文献	評価
<b>口碑伝説</b>				
T1	平取町二風谷	世界はアメマスの上につくられた	更科(1981)	○
T2	弟子屈町(屈斜路湖中島)	屈斜路湖の中島と大鯨(アメマス)	更科(1955)	○
T3	千歳市(支笏湖)	支笏湖の鯨(アメマス)伝説	更科(1955)	○
T4	虻田町	鯨(カジカ)	更科(1963)	○
T5	千歳, 羽幌町焼尻島	焼尻島漂着伝説	更科(1955)	×
T6	厚真町浜厚真	大魚	北海道教育庁社会教育部文化課 (編)(1989)	○
T7	白老町	アカエイ	犬飼(1943)	○
T8	白老町	悪魔	アイヌ文化保存対策協議会(編)(1969)	○
T9	長万部町	魔物	アイヌ文化保存対策協議会(編)(1969)	○
T10	平取町	小さい黒い魚	北海道教育庁生涯学習文化課(編) (1998)	○
T11	新冠町	黒い魚	更科(1955,1971)	○
T12	本別町	鴉(カラス)	更科(1968)	○
T13	平取町(沙流川)	沙流川の河童	更科(1971)	△
T14	平取町二風谷	文化神の投槍が破った山	更科(1971)	×
T15	幕別町	鯨(クジラ)	北海道教育庁生涯学習部文化課(編) (1998)	○
T16	釧路市	クシロの津波	北海道廳(1940)	○
T17	釧路市(春採湖)	津波と春採湖	北海道廳(1940)	○
T18	釧路市, 阿寒町, 千島列島	鶴が野生になった由来	佐藤(1968)	△
<b>儀式および教え</b>				
C1	釧路市	釧路の屈斜路湖のコタン		○
C2	鶴川町, 平取町	鶴川から平取地方のコタンの儀式		○
C3	平取地方	平取地方の言い伝え	アイヌ文化保存対策協議会(編)(1969)	○
C4	美幌町	美幌コタンの儀式		○
C5	音更町	十勝音更コタンの儀式		○
C6	長万部町	長万部コタンの儀式		○
C7	幕別町	地震に関する教え 1	北海道教育庁生涯学習部文化課(編)	○
C8	穂別町富内	地震に関する教え 2	(1998)	○
<b>地名</b>				
G1	網走市藻琴	トイベケレウシ	秋葉(1985a)	△
G2	常呂町豊川	ライトコロ	秋葉(1985b)	○

その結果と本論の結果をまとめると、過去に地震もしくはそれに起因するであろう津波に襲われた可能性のある地域は、太平洋側、とりわけ、内浦湾沿岸と胆振～日高海岸および釧路海岸に多い。また内陸では、沙流川中流域、十勝川中流域、およびサロマ湖

東側とその内陸部である屈斜路湖周辺に多い(第1, 5図)。この地域性は、被害地震の震央分布に類似している[宇佐美(2003); 第2図]。

また、アイヌ文化期の「神の家」や「戦いのための砦施設」とされるチャン[児島(2004)]の分布している地

域[右代(2000);第5図b]と、地震や津波に関する口碑伝説などが記録されている地域(第5図a)を比較すると、チャシの分布密度に係わらず、地震と津波に関する口碑伝説は太平洋沿岸で多い傾向にある。チャシの分布をアイヌの人々が住んでいたおおよその地域とみなした場合、チャシが分布するにも係わらず地震に関する口碑伝説が記録されていない地域は、アイヌ文化期とそれ以前の時期において、地震による被害を被っていないのであろう。口碑伝説の地域性から見て、北海道北部の日本海やオホーツク海沿岸域がそのような地域に該当する。

よって、アイヌ文化期とそれ以前における地震の発生地域は、現在とほぼ同様であり、主に太平洋側であったことが推測される。なお、個々の文献や口碑伝説の中に年代や時代を示す記述はなく、アイヌ文化期かそれ以前の出来事であろう、という程度のことしかわからなかった。よって、既知の歴史地震との対比をすることは出来ない。

宇佐美(2003)によると、日本海側では1741年以降、オホーツク沿岸地域では1872年以降M6以上の地震が発生している(第2図)。それにもかかわらず地震に関する口碑がそれら沿岸地域において記録されていないことは、清水(2005b)が指摘しているように、地震や津波に襲われた周期が長かった可能性や北海道北部・オホーツク地域のアイヌの人々(または北方少数民族)に関する記録の少なさによるものかも知れない。

## §5. おわりに

本論では、アイヌの口碑伝説を対象とした歴史地震に関する記録の収集を行い、北海道とその周辺海域における過去の地震活動について検討を行った。その結果、地域性はある程度推測できるが、時代性についてはアイヌ文化期かそれ以前程度としか言及できず、時期の推定は難しい。

本論で対象とした文献史料は、20世紀の初めにアイヌの古老らから収集されたアイヌの口碑伝説であり、文字による記録ではない。このため、どうしてもその確からしさに劣る面があることは否めない。また、米田(1995)は、「伝承されてきた説話類がどの程度歴史的事実を反映したものなのかは、厳密な検討を要する問題であり、史料としての利用に慎重さが必要とされることはいうまでもない」とし、奥田(1996)は、「アイヌ口頭文芸を歴史研究の資料とするには、まず現実の歴史をどのように反映しているかについてのそれぞれのジャンルごとの性格の違いを考慮しなければならない」と述べている。ここで、奥田(1996)や本田編(2005)によれば、アイヌ口頭文芸(もしくは口承文芸)のうち物語性を持つものを形式の上から大きく分けると、神謡(カムイユカラなど)、英雄叙事詩(ユカラなど)、散文説話(ウウエペケレなど)の3つのジャンルを立てる

ことができる。本論で引用したアイヌの口碑伝説は、上記3種類もしくは他のジャンルに分類できると思われるが、個々の口碑伝説について、ジャンル分類や史料性に関する検討は行っていない。しかし、北海道における地震に関するアイヌの人々の記録が、地震に伴い生じる自然事象の具体的な内容を含み、且つこれだけ収集できたことは、アイヌ文化期とそれ以前の時期において、北海道、特に太平洋側がしばしば地震に襲われたことを示すと考えられる。

アイヌ文化期とそれ以前の時期において地震による被害を被ったと推測される地域が、現在の震央分布から予想される地域とほぼ同様であることは、少なくとも口碑伝説等が形作られたであろうアイヌの人々の“伝統的な文化”の期間とほぼ同期間の将来においても、現在の地震活動の特徴が継続するであろう事を示唆する。ここで、アイヌ文化期を12・13世紀以降[右代(1991)、菊地(1995)など]とし、アイヌの人々の“伝統的な文化”の期間を19世紀末まで[山北(2000)]とすると、現在の地震活動の特徴が継続するであろう期間は将来約700年間となる。但し、同期間と同じかそれよりも長周期の地震活動や地震の発生間隔などについては、活断層や地震イベント堆積物などを対象とした調査方法に頼るしかないであろう。

今後は、アイヌの口碑伝説や儀式・教えなどの言い伝えに加えて、蝦夷三官寺等に保管されている日鑑記などを対象とした文献調査を行うとともに、地震イベント堆積物などを対象とした調査結果も含めて、過去の地震発生域の時空間分布や地震の発生周期などを総合的に検討することが必要である。

また、本論で扱ったアイヌの口碑伝説の史料性については、アイヌ史やアイヌ口承文芸の研究者による評価を待ちたい。

## 謝辞

アイヌ語地名の項に記した(トイペレケイとライトコロ)の文献史料は、北見市の教員であられる戸部千春先生にご教授頂くとともに、非常に詳細な解説を頂いた。北海道立地質研究所の田近淳主任研究員には、新冠泥火山の貴重な写真をご提供頂いた。札幌大学本田優子助教授および北海道立アイヌ民族文化研究センターには、文献収集についてお世話になった。また、北海道開拓記念館の右代啓視課長と学芸員の方々には、アイヌ文化についてご教授頂くとともに、文献収集についてお世話になった。査読をして頂いた北海道大学の中村有吾博士には、有益なご指摘とご意見を頂き、本論は著しく改善された。

以上の方々のご協力が得られなければ、本報告はまとまらなかった。ここに記して深く感謝いたします。

## 文献

- アイヌ文化保存対策協議会(編), 1969, アイヌ民族誌. 第一法規出版株式会社, 800 pp.
- 秋葉 実(解説), 1985a, 松浦武史郎, 1859, 戊午東西蝦夷山川地理取調日誌(上). 北海道出版企画センター, 676 pp.
- 秋葉 実(解説), 1985b, 松浦武史郎, 1859, 戊午東西蝦夷山川地理取調日誌(中). 北海道出版企画センター, 702 pp.
- 千木良雅弘・田中和弘, 1997, 北海道南部の泥火山の構造的特徴と活動履歴. 地質学雑誌, **103**, 781-791.
- 知里真志保, 1956, 地名アイヌ語小事典. 北海道出版企画(1984年, 復刻版), 169 pp.
- 藤原 治・池原 研・七山 太, 2004, 地震イベント堆積物研究の重要性と防災研究への展望. 地質学論集, no. **58**, 1-10.
- Gorshkov, G. S. 1954, Chronology of eruptions of volcanoes in the Kurile chain. Trudy Lab. Vulkanol, **8**, 58-99.
- 北海道廳編, 1940, 北海道の口碑傳説. 日本教育出版社, 203 pp.
- 北海道教育庁社会教育部文化課(編), 1989, アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査VIII). 北海道教育委員会, 75 pp.
- 北海道教育庁生涯学習部文化課(編), 1998, アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査XVII). 北海道教育委員会, 114 pp.
- 平川一臣・中村有吾・越後智雄, 2000, 十勝地方太平洋沿岸地域の巨大古津波. 月刊地球号外, no. **31**, 92-98.
- 本田(米田)優子編, 2005, アイヌの歴史と物語世界. シンポジウム&公開講座報告集【アイヌ文化研究の今】(1), 札幌大学ペリフェリア・文化科学研究所, 162 pp.
- 池原 研, 2000, 北海道北端部, 利尻トラフの海底堆積物中にタービダイトとして記録された地震. 第四紀研究, **39**, 569-574.
- 犬飼哲夫, 1943, 天災に對するアイヌの態度(呪ひその他). 北方文化研究報告, **7**, 89-102.
- 今井 功・角 靖夫, 1957, 5万分の1地質図幅「富川」. 工業技術院地質調査所.
- 伊藤せいち, 1983, 常呂町のアイヌ地名. オホーツク文化資料館, 87 pp.
- 地震調査研究推進本部地震調査委員会, 2003, 千島海溝沿いの地震活動の長期評価について. 31 pp.
- 核燃料サイクル開発機構, 2004, 高レベル放射性廃棄物の地層処分技術に関する研究開発—平成15年度報告—. 核燃料サイクル開発機構, JNC TN1400 2004-007.
- 活断層研究会編, 1991, 新編日本の活断層—分布図と資料, 東京大学出版会, 437 pp.
- 菊地俊彦, 1995, オホーツク文化の展開とアイヌ文化. 講座文明と環境第 6 巻歴史と気候(吉野正敏・安田喜憲編), 朝倉書店, 156-170.
- 気象庁編, 2005, 日本火山総覧. 気象庁業務支援センター, 第3版, 635 pp.
- 小林孝二, 2000, アイヌ民族の住居(チセ)に関する研究—近世・近代アイヌ民族の住居に関する検証とその成立過程に関する考察—, 「北の文化交流史研究事業」研究報告, 北海道開拓記念館, 119-140.
- 小林孝二, 2004, 中世期北海道におけるアイヌの住居をめぐる視点. 平成12年度～平成15年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))「北海道の中世社会とアイヌ文化の変容過程に関する研究」課題番号 12610324 研究成果報告書(研究代表者 氏家 等, 北海道開拓記念館事業部 研究員), 平成16年3月, 113-124.
- 児島恭子, 2004, 伝承から見たチン再考. 宇田川洋先生華甲記念論文集, 299-325.
- 小山真人, 1999, 日本の史料地震学研究の問題点と展望. 地学雑誌, **108**, 346-369.
- 工業技術院地質調査所, 1971, 20万分の1地質図「帯広」.
- 宮田 登・高田 衛編, 1995, 鯨絵—震災と日本文化, 里文出版, 369 pp.
- 中田 高・今泉俊文編著, 2002, 活断層詳細デジタルマップ(+DVD2枚+付図). 東京大学出版会.
- Nanayama, F., Satake, K., Furukawa, R., Shimokawa, K., Atwater, B. F., Shigeno, K., Yamaki, S., 2003, Unusually large earthquakes inferred from tsunami deposits along the Kuril trench. Nature, **424**, 660-663.
- 二風谷部落誌編纂委員会編, 1983, 二風谷. 二風谷自治会, 215 pp.
- 仁科健二・高清水康博・嵯峨山 積, 2004, 北海道オホーツク沿岸で確認されたイベント砂層. 日本地質学会第111年学術大会(千葉)講演要旨集, p.299.
- 奥田統巳, 1996, 歴史研究としてのアイヌ口頭文芸. 北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要, **2**, 19-31.
- 陸地測量部, 1897a, 北海道仮製五万分一図「鐘沸」.
- 陸地測量部, 1897b, 北海道仮製五万分一図「瀉沸沼」.
- 陸地測量部, 1897c, 北海道仮製五万分一図「常呂」.

- 寒川 旭, 1999, 遺跡に見られる液状化現象の痕跡. 地学雑誌, **108**, 391-398.
- 更科源三, 1955, 北海道伝説集・アイヌ編. 楡書房, 279 pp.
- 更科源三, 1963, アイヌ民話集. 北書房, 206 pp.
- 更科源三, 1968, 歴史と民俗アイヌ. 株式会社社会思想社, 192 pp.
- 更科源三, 1971, アイヌ伝説集. 北書房, 367 pp.
- 更科源三, 1981, アイヌ伝説集. みやま書房, 33 pp.
- 佐々木利和・古原敏弘・児島恭子, 2005, アイヌの道. 吉川弘文館, 242 pp. (巻末資料, 17 pp.)
- 佐々保雄, 1954, 新冠泥火山とその十勝沖地震による変動. 十勝沖地震調査委員会(編集), 十勝沖地震調査報告, 242-259.
- 佐藤直太郎, 1968, 続・佐藤直太郎郷土研究論文集. 釧路叢書, no. **9**, 釧路市, 290 pp.
- 下川浩一・栗田泰夫・佐竹健治・吉岡敏和・七山 太・荻谷愛彦・小松原 琢・羽坂俊一・重野聖之, 2000, 地形・地質調査 1. 科学技術振興調整費「日本海東縁部における地震発生ポテンシャル評価に関する総合研究」(第Ⅱ期平成 9~10 年度)成果報告書, 科学技術庁研究開発局, 65-85.
- 添田雄二・七山 太・重野聖之・古川竜太・熊崎農夫博・石井正之, 2004, 史跡国泰寺跡および汐見川低地において認定された巨大津波イベント. 地質学論集, no. **58**, 63-75.
- 総理府地震調査研究推進本部地震調査委員会 1997, 日本の地震活動ー被害地震から見た地域別の特徴ー. 391 pp.
- 高橋浩晃・笠原 稔, 2005, 留萌支庁沿岸部の地震活動と北海道北部のテクトニクス. 北海道大学地球物理学研究報告, no. **68**, 199-218.
- 高清水康博, 2005a, 北海道鶴川町における津波に関するアイヌの口碑伝説と祭儀. 北海道立地質研究所報告, **76**, 97-100.
- 高清水康博, 2005b, 北海道における津波に関するアイヌの口碑伝説と記録. 歴史地震, **20**, 183-199.
- 田村 慎・笠原 稔・森谷武男, 2003, 臨時地震観測による北海道北部地域の微小地震活動と地殻構造. 地震 2, **55**, 337-350.
- 土屋祝郎, 1975, 釧路の語源ー摩周・阿寒・釧路をめぐってー. 釧路叢書, no. **16**, 釧路市, 153-168.
- 右代啓視, 1991, オホーツク文化の年代学的諸問題. 北海道開拓記念館研究年報, **19**, 23-52.
- 右代啓視, 2000, 北東アジアにおけるチャシの起源と位置づけ. 「北の文化交流史研究事業」研究報告, 北海道開拓記念館, 35-68.
- 宇佐美龍夫, 2003, 最新版日本被害地震総覧[416]ー2001. 東京大学出版会, 605 pp.
- 山田秀三, 1982, アイヌ語地名の研究 第一巻. 山田秀三著作集, **1**, 草風館, 334 pp.
- 山田秀三, 1983a, アイヌ語地名の研究 第二巻. 山田秀三著作集, **2**, 草風館, 343 pp.
- 山田秀三, 1983b, アイヌ語地名の研究 第三巻. 山田秀三著作集, **3**, 草風館, 365 pp.
- 山田秀三, 1983c, アイヌ語地名の研究 第四巻. 山田秀三著作集, **4**, 草風館, 378 pp.
- 山田秀三, 2000, 北海道の地名ーアイヌ語地名の研究別巻. 草風社, 800 pp.
- 山北尚志, 2000, アイヌ民族の伝統的な文化. アイヌ民族の歴史と文化(田端 宏・桑原真人監修), 山川出版社, 97-112.
- 米田優子, 1995, アイヌ農耕史研究にみられる伝承資料利用の問題点ー穀物の起源説話に関する検討を中心にー. 北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要, **1**, 1-25.
- 吉田 巖, 1984, アイヌ史資料集 第三巻 郷土研究篇. 北海道出版企画センター, 57 pp.